

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>重点施策</b>			
重点施策 1 / 2	<p>1 建学の精神に基づく教育・研究の「質の保証」を維持・発展させ、教会と社会および地域に貢献し、本学が永続的に使命を果たしていくためにも、中期計画2年目となる2014年度の事業計画を着実に実行していく。</p>	<p>1 本学の建学精神に基づく教育研究の充実を目指して、以下の事項を実施した。</p> <p>① チャペルの映像音響機器の刷新に対応し、日英での賛美や、多様な賛美形態の推進など、チャペルの充実を図った。</p> <p>② 2015年度の認証評価に向けて、全学を挙げて自己点検・評価作業を行って報告書を作成し、大学基準協会に提出した。</p> <p>③ 中期計画に基づき、神学研究科博士後期課程を4名の学生で開始した。</p> <p>④ 短期留学生派遣として、国際キリスト教学専攻2年生のオーストラリア研修（秋学期）を開始し、成果を上げた。交換留学制度により秋学期に学生3名が米国のバイオラ大学に留学した。</p> <p>⑤ FD活動に基づき、3ポリシーに従った教育内容・方法についてのPDCAを実施し、参加型授業の推進など教育改善に努めた。</p> <p>⑥ キリスト教福祉専攻に係る啓発活動や教会音楽をとおしての地域貢献を押し進めた。</p> <p>⑦ ジョン・テンブルトン財団助成による共立基督教研究所・国際宣教センターの研究活動を継続するとともに、科研費による研究活動を専任教員3名が行った。新規申請支援により1件が採択された（2015年度より）。</p>	<p>1 左記の① - ⑦項目について、計画どおり実施することができた。</p>

\*重点施策 → 次頁につづく

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
重点施策 2/2	<p>2 最重要項目である学生募集・寄付金募集について目標を達成する。学生募集は、近年向上の見られる国際キリスト教福祉学科のための対策を継続するとともに、懸案事項である神学科のための対策を強化し、全ての科における定員充足を最短期間で実現する。寄付金募集は、「明日の世界宣教者育成」支援会（TCU支援会）を通して、同窓生、在学生及び保護者、支援教団・教派とその所属教会など、本学に関係する全ての方々からご支援を頂き、そのことを通して福音の前進に共に寄与していく体制を確立する。</p> <p>3 中期計画の「主要7項目」のうちでは、2014年度はNo. 6に記されている「神学研究科の英語によるプログラム」について検討する。</p> <p>4 予算においては、2012年度実績、2013年度予算に続いて資金収支均衡を実現させ、中期計画期中での帰属収支均衡に繋げる（計画では2017年度の達成を目指している）。運用資産額約20億円の維持及び増強のため「資金収支」均衡は予算作成の前提条件である。</p>	<p>2 組織的な学生募集活動を展開した結果、昨秋以来68名の入学生・新入生を迎えた（アジア神学コースの自費学生1名）。国際キリスト教福祉学科の入学定員充足に課題を残した。</p> <p>寄付金募集に関しては、地区支援会が目標よりも一つ多い13に増加した。目標達成率は55%ながら、支援金額は前年度比を徐々に上げている。</p> <p>3 中期計画に掲げた「神学研究科の英語によるプログラム」については、「神学研究者・神学教育者コース」の英語での提供の可能性を検討しているが、現在カリキュラム改訂中であるため、2015年度に新カリキュラム案と合わせて結果を報告する。このケースでは、教員増による研究科プログラム設置が可能かが焦点となる。他方、現行課程に自費学生の応募が増加するなかで、アジア神学コースの神学科1・2年次教育課程に代わる博士前期課程の導入の可否の判断は慎重に行う必要がある。</p> <p>4 決算については、国庫補助金の増加や有価証券償還時の為替や時価評価による要因が寄与し、資金収支で2億7千万円の増となり、資金額は22億4百万円となった。帰属収支は1億2千4百万円、消費収支は1億4百万円とそれぞれプラスすることができた。</p>	<p>2 組織的な学生募集活動を展開した結果、学部および博士前期課程それぞれの入学定員をあと1名で満たし、編入・博士後期定員は充足する結果を得た。</p> <p>中期計画に基づく寄付金達成の取り組みは2年目を迎え、寄付金総額は前年度比106.6%であった。</p> <p>私立大学等改革総合支援で2件（合計2000万円）の採択があり、施設面ではグローバル・ラウンジ（3か所）、アクティブラーニング教室（2室）の設置補助を受けた。前年度から学生数が若干減少したにもかかわらず経常費補助金が増加したことは、補助金獲得に向けた努力の成果の表れと言える。</p> <p>通信教育の一環として、本学教員の授業等をネット上で公開するための準備を整えた。</p> <p>EAI（秋学期）に13名、新しく開始したThe Japan Program（秋・冬学期）に7名の学生を受け入れた。</p>

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
学長室			
(1) チャペル	<p>① チャペルが学生たちにとり、大学生生活の根幹、靈性を養う場となるよう、運営体制を充実させる。</p> <p>② 今まで取り組んできたチャレンジチャペルを検証・評価し、礼拝の本質を保ちつつ、今の時代と多様性のある本学の文化に合ったチャペルのかたちを追求する。</p> <p>③ 新しく導入する映像、音響機器を有効に活用する。</p>	<p>① チャペル担当教員を任命するとともに、チャペルコア会議（学長室の諮問機関で、学長・学部長・研究科委員長・チャペル担当教員・チャペル担当職員により構成）を設置して運営体制を強化した。同会議において充実した話し合いを重ねられ、チャペルの見直しに取り組むことができた。</p> <p>② 以下のプログラムを導入することで、今の時代、及び多様性のある本学の文化に合ったチャペルのかたちの実現に取り組んだ。</p> <p>a. 賛美形態の改善：          ・現行の『讃美歌』を軸に、『教会福音讃美歌』『新聖歌』から約50曲を、コンテンポラリーから約15曲を、暫定的に選定し、チャペルで用いることとした。          ・週に1日をコンテンポラリーの曲を用いる日とし、小規模賛美チームが曲の選択とリードを担当することとした。          ・歌詞は日本語/英語（必要に応じてローマ字表記、英語のみ）で毎回表示し、留学生も賛美しやすい環境を整えた。</p> <p>b. 月に2回の学生による司会を導入した。</p> <p>c. 共同体としての意識をもち、祈禱課題（学内における感謝、とりなし）、建学の精神に沿う日本と世界に目を向けた祈禱課題（教界、時事、宣教、教会と国）を共に祈る「共同体の祈り」を月2回導入した。</p> <p>d. 出席の改善、魅力あるチャペルとするための取り組みとして、1週間通して一つのテーマでチャペルをもつ「シリーズ」チャペルを行った。</p> <p>③ 新しく導入された映像機器により、チャペルで賛美する曲の英語/日本語の歌詞やメッセージに関連する映像の表示を行った。また、音響機器により、賛美形態の幅に広がりをもたせることができた。</p>	<p>①②の新しい取り組みと、③の映像・音響機器の活用により、チャペルが充実し、建学の精神の敷衍、及び学生たちの積極的な参加に効果を上げることができた。</p>

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(2) 教育行政	<p>① 自己点検・自己評価 2015年度の大学基準協会による評価に向けて自己点検・評価を実施する。そのために各部署におけるPDCAサイクルの充実を図る。</p> <p>② 外部研究資金獲得の推進 a. 外部研究資金の情報提供に努める。 b. 科学研究費助成事業についてのファカルティ・フォーラムを実施する。</p> <p>③ 内部質保証 a. 中期計画評価指標に基づいてPDCAサイクルを実施する。 b. 『自己点検・自己評価報告書 2014』を作成する。</p>	<p>① 2015年度の大学基準協会による評価に向けて、自己点検・自己評価委員会を中心に、自己点検・評価活動を行い、『自己点検・自己評価報告書 2014（平成26）年度』の作成を行った。その際、特に学園運営会議、大学運営会議、学務会議が主体となって点検・評価活動を行うことを意識した年となった。</p> <p>② a. 科研費では継続課題を含む3件の採択課題が、また米国民間のJohn Templeton Foundationより1件の研究助成採択があった。 b. 科学研究費助成事業についてのファカルティ・フォーラムを2回実施した。</p> <p>③ a. 中期計画評価指標に基づいてPDCAサイクルを実施している。 b. 『自己点検・自己評価報告書 2014（平成26）年度』の作成をとおして、各部署の点検・評価の積み重ねと、学内における課題共有を深めることができた。</p>	<p>① 学長室を中心として教育諸法規に準じ、中教審答申を参照しつつ、大学の教育研究改革・改善を推進している。今後は、点検評価により明らかになった課題とその改善に各部署で継続的に取り組んでいく。</p> <p>② 2015年度にも新規採択があり、外部研究費獲得促進の成果が現れている。さらに積極的な申請・獲得を促進するため、FD等による継続的な取り組みを行っていく。</p> <p>③ 自己点検・自己評価作業を、全学的な取り組みとして進めることができた。今後は、この点検評価活動が日常化していくことが求められる。</p>
(3) 海外協定校	<p>① 短期留学生（EAI）の募集活動を継続する。</p> <p>② 新たに北米及びアジア地域の3校との協定を目指す。</p> <p>③ ダブルディグリープログラム協定校を新たに開拓する。</p>	<p>① 10月、3月に米国の協定校に教員を派遣して募集活動を行った。</p> <p>② 北米の1校と協定を結び、複数校と協定に向けた協議を開始した。また、アジアでの協定校開拓の可能性を探るため、香港、インドの大学を訪問し協議した。</p> <p>③ ダブルディグリープログラム協定に向けた協議を、北米の1校と開始した。</p> <p>④ 例年より多数となる短期留学生20名（EAI：13名、Japan Program：7名）、アジア神学コース生7名（うち自費学生1名）を受け入れた。</p>	<p>例年より多数の留学生を受入れることができ、教育理念であるグローバル化の実現に向け成果を上げることができた。ダブルディグリープログラムを含む協定校の開拓については、引き続き協議を継続し、協定締結に向けて努力する必要がある。</p>
(4) 加盟国際団体	<p>本学が加盟する国際団体主催の会合・研修会に教員を派遣する。</p>	<p>① IAPCHE (International Association for the Promotion of Christian Higher Education) 主催の Conference of Presidents/ Principals and Senior Leaders of Christian Colleges and Universities (於マレーシア) に学長が参加した。17カ国のキリスト教高等教育機関の学長が集まる会合で、世界中の教育・研究の事例や課題を分かち合うとともに、ネットワークづくりに役立てた。</p> <p>② CCCU (Council for Christian Colleges &amp; Universities) Chief Enrollment Officers Conference に教員1名を派遣し、短期留学生の募集活動に役立てた。</p>	<p>諸団体の会合などを通して、国際的な情報収集とネットワークを広げることができた。</p>

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(5) 学生募集	<p>教会、キャンプ、チャーチスクール、ミッションスクールなどの訪問数を昨年度比1.5倍を目標とする。ただし単に訪問数を増やすのではなく、出願につながるような効果のある訪問を増やす。</p>	<p>[各専攻の志願者数]                      〈1年次〉                      神学科(目標22名) : 24名                      国際キリスト教学専攻(目標12名) : 7名                      キリスト教福祉学専攻(目標8名) 1名                      〈編入〉                      神学科2年次編入(目標3名) : 2名                      国際キリスト教学専攻2年次編入(目標0名) : 0名                      キリスト教福祉学専攻2年次編入(目標3名) : 1名                      神学科3年次編入(目標15名) : 13名                      〈大学院〉                      修士課程(目標18名) : 17名                      博士課程(目標2名) : 2名                      〈専攻科〉                      教会音楽専攻(目標5名) : 0名</p> <p>教会訪問数(目標:200) : 107(「昨年度67」)                      キャンプ訪問数(目標:24) : 27(昨年度22)                      2014年度資料請求者数: 325(昨年度207)                      オープンキャンパス・体験入学者数(目標:250名) : 130名(昨年度164名)                      オープンキャンパス、体験入学参加者中の受験志願者数: 34名(昨年度29)                      キリスト教主義高校訪問数(目標20) : 6校(昨年度15校)</p> <p>指定校数: 33校(昨年度22校)                      指定校からの出願者数: 2名(昨年度2名)</p> <p>チャーチスクール訪問数(目標:20校) : 19校(内模擬授業実施4回)(昨年度12校、模擬授業3回実施)                      チャーチスクールからの出願者数: 2名(昨年度1名)</p>	<p>学部全体としては1年次定員33名に対して32名の入学者となった。目標値には至らなかったが、昨年度の29名から増加させることができた。神学科では目標数以上の出願を達成できたが、国際キリスト教福祉学専攻では達成できなかった。昨年度は国際キリスト教学専攻が多く、神学科は少なかったことから、年度ごとに学科専攻の波があるといえるが、学部全体で見ると入学者は増加している。</p> <p>オープンキャンパス参加者数は10月のシオン祭オープンキャンパスの日に台風が来たことの影響もあり昨年度より人数を減じたが、受験者数は昨年度より増えている。これはhi-b.a.一泊キャンプ形オープンキャンパスに参加した入学者が6名もいることから、hi-b.a.との協力強化の効果が出てきているものと思われる。</p> <p>編入学については、目標値には至らなかったが、神学科3年次編入定員の12名を超える13名の入学者を得ることができた(昨年度は11名)。</p> <p>訪問事業に関しては、昨年度比1.5倍の訪問目標を達成できていない項目もあるが、単に訪問数を増やすのではなく出願につながる対応を行ってきている。</p> <p>資料請求者数は昨年度の約1.5倍となり、今年度のメディア媒体活用が効果的だったといえる。</p> <p>大学院の入学者数は、修士課程17名(目標18名)、博士課程2名(目標2名)と、ほぼ達成できた。教会音楽専攻科は0名(目標5名)で目標を達成できなかった。</p> <p>学部、大学院、専攻科、すべてを合わせた入学者数は68名(目標88名)で目標値には達しなかったが、2012年度58名、2013年度62名、2014年度67名と、入学者は継続して増加している。</p>

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(6) 広報	教会音楽専攻科、社会人・シニアコース、アジア神学コースの各パンフレットを作成する。	<p>a. 教会音楽専攻科パンフレット：2015年度に持ち越し。</p> <p>b. 社会人・シニアパンフレット：8/20完成。</p> <p>c. アジア神学コースパンフレット：英語版TCUパンフレットとして3/23完成。</p> <p>d. 広報媒体の多言語化については、英語版パンフレットを作成することができた。</p>	<p>①</p> <p>a. ウェブサイトアクセス解析では、昨対比23.54%増のアクセス数があった。入学金廃止リリース、本学教員に関するニュースによるアクセス数増加が要因として考えられる。</p> <p>b. ウェブ経由資料請求者数は、ほぼ昨年度並であった。</p> <p>a. b. から、ウェブサイト訪問者数は増加したが資料請求をする入学希望者数は増えなかったといえる。</p> <p>② 広報ツール調査：新入生聞き取り調査を実施し、適切性について調査を行い、概ね良い評価を得た。</p> <p>③ ページインサイト：本学Facebookページへの「いいね！」数は年度当初942から、年度末1148に増加した。大学の現状や学生ブログ配信がより多くの人に届くようになった。</p> <p>④ プレスリリース：入学金廃止リリースは、一般紙3紙、キリスト教紙2紙、その他大学進学系ブログ2サイトに取り上げられた。3月ケアチャーチ講座のリリースは、取材に2社が訪れ、記事になった。リリース数2、採用数2で発信数が少なかった。</p>

2014年度事業報告

項目	計 画	報 告	
		達成状況	評価
(7) 募金・支援会	<p>① 募金額目標 a. 「明日の宣教者育成募金」目標を10,000万円とする。</p> <p>[内訳] 大学献金 8,000万 大学院設立献金 1,000万 夏期伝道献金 150万 教会音楽献金 300万 留学生奨学金基金 250万 教会教職者志望学生奨学金基金 300万</p> <p>② 重点活動 a. 各地区支援会運営の補佐と立ち上げを行う。 関東、愛知・岐阜、関西、岡山、四国、広島、福岡・山口、沖縄、新潟、北海道（新規：愛知東三河、福島、北陸など） b. 学園デー（TCUのつどい）の開催 関東、岡山、福岡・山口、四国、新潟、愛知など c. 特別支援会員の開拓 d. TCU支援会報の作成（7月）</p>	<p>① 実績：5,522万円（目標の55.2%）</p> <p>② a. 地区支援会の全国展開目標12地区を越えて13地区となった（カバー都道府県数27 [57.4%]）。 b. 地区支援会による「学園デー」「TCUのつどい」等の開催数17。13地区のうち支援者数・支援額が昨年対比を上回っているのがそれぞれ8地区・9地区。 c. 特別支援会員104（昨年対比97.2%）、大口寄付金額で37,662,987円（昨年対比109.3%） d. 支援会報を7月に発行した。</p> <p>③ a. 支援者数の目標2000に対して1038（目標達成率51.9%、昨年対比102.1%） b. 同窓生の支援会加入率19.1%</p>	<p>①募金額の達成率は目標に対して55.2%であるが、年度ごとに着実に増加している。</p> <p>② a. 地区支援会は、目標12地区を越え、13地区に支援会が立ち上げられた。13地区のうち支援者数が8地区・支援金額が9地区、昨年対比を上回っており、順調に進んでいる。 b. 地区支援会による「学園デー」「TCUのつどい」等の開催は、地区支援会および地区支援会立ち上げ準備地区でも開催され、活発に開催されている。 c. 特別支援会員数は、若干減少したが、大口寄付金額は昨年度を9%上回っており、概ね良好である。</p> <p>③ a. 目標に対しては51.9%であるが、年度ごとに着実に伸びており、昨年度に続き1000を超える支援者が与えられた。 b. 同窓生の支援会加入率は、大学の特色から見ても今後の課題である。先ず50%を目指したい。</p>
(8) 地域連携	<p>教会音楽・福祉・異文化交流・地域史研究などの領域で地域連携と社会貢献を継続する。</p>	<p>① 地域連携・社会貢献 異文化交流では、地域の施設や団体の要請に応じて留学生を送り出している。教会音楽・福祉の分野において多数の講座やセミナーを企業・教会と連携して実施した。</p> <p>② ボランティア 社会の要請に対して、随時、外部受け入れ団体を通じて学生ボランティアを派遣した（下記参照）。また千葉県社会福祉協議会の大学ボランティア推進に協力した。</p> <p>夏期・冬期・春期休暇中：東仙台 8月：広島 春期休暇中：福島</p>	<p>いずれの講座、コンサートも多くの参加者を数えている。また、単発ではなく連続しての講座もあり、充実した内容を行うことができた。</p> <p>セミナー・研究会・シンポジウム等は多数開催されており、地域小学校への講師派遣は年2回、全国への講師派遣は10回以上、学生ボランティア活動は4回行われるなど、大学としての地域福祉に関わる諸活動を実施することができた。</p>

## 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(9) クロスメディア	学長室にクロスメディア開発のためのタスクフォースを位置づけ、特別講演やチャペルなどのネットワーク上での公表など実現可能なことから実施に移す。	<p>a. 学長室にクロスメディアについて検討する組織を設置した。</p> <p>b. 創立記念礼拝・講演の映像を制作した。itunesUを使ったデジタルコンテンツを配信できる環境を構築した。</p> <p>c. インターネットによる教育コンテンツ提供の第一段階として、短い動画をパッケージした教育コンテンツを無償で提供することを検討している。</p>	<p>a. 定期的に会議を開催することで、方向性を明らかにし、コンテンツの制作・準備を行うことができた。</p> <p>b. 創立記念礼拝・講演の映像を制作することができ、またitunesUの環境を準備することができた。</p> <p>c. 教育コンテンツを中心に検討したため、プラットフォームの構築に関しては検討できなかった。</p>



# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>2 神学部</b>			
① 現行カリキュラムの評価を行い、16年度より実施するカリキュラム改訂案を検討・確定する。 ② FDの一環として、学部・研究科・各学科専攻のラーニングアウトカムに関する研修を行う。 ③ 学生・学修ポートフォリオの実施とそれに基づく教育改革を行う。 ④ 国キ専攻生以外のグローバル化教育の検証を行う。 ⑤ アジア神学コース自費学生の獲得のための募集活動、教会教職課程3年次編入定員の拡大を目指して募集活動を行う。  ⑥ アジア神学コースの大学院修士課程導入について検討を行う。 ⑦ 学務会議をとおして、研究科・各学科専攻の教員会議のバランスを図る。 ⑧ 研究等における教員間の交流を促進する。	① 自己点検・自己評価活動を通して、結果的にカリキュラムの検討を行うことになった。 ② 教授会内でラーニングアウトカムに関する研修を1回実施した。 ③ 学生ポートフォリオを用いて卒業前面談を実施した。担当教員による学修評価コメントを今後のカリキュラム改編に用いていく。 ④ 自己点検・評価活動を通して、グローバル化教育進展の必要を覚えさせられた。グローバルラウンジ3カ所の設置を実現した。 ⑤ 今年度は、学長のリーダーシップのもとに学生募集に新たに取り組んだ。	① 3回のFD活動は充実していたが、キリスト教リベラルアーツ教育の再確認に特化していなかった。学生のラーニングアウトカムの評価指標の設定は未だ充分ではない。 ② 学生ポートフォリオを学修と寮生活をカバーするものにでき、総合的な教育に貢献している。 ③ ユースミニストリーは充実し、受講者の満足度も高い。教会音楽副専攻は受講者の少なさが課題である。 ④ 国外大学への学生派遣数は変わらないが、短期留学派遣先としてヨーロッパの1大学を開拓することができた。 ⑤ アジア神学コース自費留学生に2名、短期留学生としてEAIに13名、The Japan Programに7名を迎えた。EAI生のうち2名は留学を延長しており、留学生の受け入れは拡充傾向がみられる。 ⑥ →重点施策3を参照。 ⑦ 各学科専攻の定員管理は行っているが、キリスト教福祉学専攻生が少ないことが課題である。 ⑧ 定員増への取り組みは進められなかった。 ⑨ 学務会議は定期的には開催したが、学科・専攻教員会議の拡充は未達であり、教育・学生指導のより綿密なPDCAサイクルの確立が課題である。 ⑩ 定年を迎える教員に代わる次世代の教員について、2回の公募の結果、ふさわしい若手教員1名を採用した。 ⑪ 通信教育課程の検討を進めている。教職免許課程や幼児・中等教育課程については情報の収集をした。	
	(1) 学部全体	⑥ →重点施策3を参照。	

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(2) 神学科	<p>① 各専攻(アジア神学コース、神学専攻、教会教職専攻)及び神学科全体の教員会議を行う。</p> <p>② 神学専攻のカリキュラムを、より総合的に神学を学ぶことができる神学総合専攻コースに改編する方向について検討を行う。</p> <p>③ 各学生の目的と能力に応じた段階的履修を指導する。</p>	<p>① 8月以降、神学科全体の教員の会合をもていない。</p> <p>② 神学専攻のカリキュラムを、より総合的に神学を学ぶことができる神学総合専攻コースに改編する件については、検討することができなかった。</p> <p>③ 各学年の目的と能力に応じた段階的履修を、担任教員を通して実施している。</p>	<p>① 神学専攻、及び教会教職専攻の3月卒業生たちと卒業前の面談を行った結果、卒業生たちからは肯定的な評価を得ていることを確認した。</p> <p>② 神学専攻のカリキュラムについて検討する会議を開催することができなかった。</p> <p>③ 段階的履修での科目の位置付けはシラバスに記されているが、より明確に分かりやすく記載する必要がある。</p>
(3) 国際キリスト教福祉学科	<p>2013年度に引き続き、国内外の災害や世界の課題への共感能力を育成する。また学生募集のために諸教団・教会、キャンプ、修養会等を訪問して、2つの専攻(国際キリスト教学、キリスト教福祉学)の特徴をアピールしていく。時代の動きを見抜いていくキリスト教的価値を身につけるためのカリキュラム充実をはかる。</p>	<p>国内外の災害や世界の課題への共感能力を育て、国際社会と国内で献身的に奉仕できる人材の育成に取り組んだ。</p> <p>また学生募集のために諸教団・教会、キャンプ、修養会等を訪問して、2つの専攻(国際キリスト教学、キリスト教福祉学)の特徴のアピールを行った。</p>	<p>国際キリスト教学専攻に比して、キリスト教福祉学専攻では、学生募集の取組の成果が思うように表れていない。今後、福祉的な人材育成のために、戦略を立てて取り組む必要がある。</p>
(3) ① 国際キリスト教学専攻	<p>① 2年目となる新英語プログラム(Big English Program)を滞りなく実施する。特に、2年生を対象として秋学期に実施するオーストラリアでの海外英語研修の成果が最大になるよう努める。</p> <p>② 前年度、非定期的開催に留まった専攻教員会議の定例化をはかる。</p> <p>③ 専攻教員全体の力で、一人ひとりに即した学習・生活指導をきめ細かく実施する。</p>	<p>① 2年目となる新英語プログラム(Big English Program)を滞りなく実施できた。2年生を対象として秋学期に実施するオーストラリアでの海外英語研修が大きな成果を上げて実行できた。</p> <p>② 専攻教員会議を昨年度に比べてより活発に開催できた。1学期に1回程度、専攻学生と教員の懇談のときもあった。</p> <p>③ 専攻教員全体の力で、一人ひとりに即した学習・生活指導をきめ細かく実施できた。卒業生6人は語学力、国際的関心、キリスト教世界観など多くの面で充実した能力を身につけ、どこに出しても通用するキリスト教リーダー候補となった。</p>	<p>2014年度に留学生と同室になった国際キリスト教学科生(以下「国キ生」)は、女子寮6名(EAI生と同室5名、ジャパン・プログラム生1名)、男子寮3名(アジア神学コース生と同室1名、シオン寮で同ユニット2名)。来年度はより多くの学生に留学生と同室になれるように促す。</p> <p>TOEICスコアでは、以下の通りの教育効果が見られた。</p> <p>a. 国キ1年生：2014年4月の入学時と、2015年2月受験時との比較では、クラス平均で23点の向上があった。10名中6名がスコアアップし、1名が同スコア、3名がスコアを落とした。スコアアップした学生は、年間を通して英語学習へのモチベーションを保ちつつ地道な努力を重ねてきた。スコアを落とした3名中2名については、英語のみならず他の科目への取り組みや、寮での生活面全体においても、モチベーション低下傾向が確認されている。</p> <p>b. 国キ2年生：2014年度の間に平均122点のスコアアップを達成した。オーストラリアでの3カ月の語学研修による効果が表れたものと考えられる。</p>

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(3) ②キリスト教福祉学専攻	<p>①「医療的ケア」科目を実施し、その結果から次年度に向けての課題を検討する。</p> <p>②キリスト者ケアワーカーの認証要件（ディプロマポリシー）を保証する教育システムを検討し、逐次実施していく。</p> <p>③学生の学びを深めるため、実習先の種別拡充を検討する。</p> <p>④学生定員8名を確保し、9名までの受け入れを目指す。</p> <p>⑤2013年度の奨学生要件を満たした学生の状況を把握し、継続して学生の励みになるような要件・基準を検討する。</p> <p>⑥キリスト教外部団体との連携を含めたセミナーを2回開催する。また、2013年度と同様に年間10件以上の教会訪問、研修会・大会への講師派遣を行うとともに、効果的な訪問方法の検討を行う。</p> <p>⑦キリスト教主義福祉事業所および地域住民が参加できる実務者研修開催の可否を検討する。</p>	<p>① 本年度からの「医療的ケア」科目2コマ分を予定どおり終えることができた。</p> <p>② キリスト者ケアワーカーの認証要件を引き続き検討中。</p> <p>③ 学生数に対して実習先は確保できている。</p> <p>④ 本年度新入生は1名にとどまった。</p> <p>⑤ 今年度から、新入生に加えて在学学生2名が奨学金対象者となった。</p> <p>⑥ 今年度もキリスト教外部団体との連携を含めたセミナーを2回開催し、本学独自でケアチャーチ講座を1回開催した。</p> <p>⑦ 実務者研修については、国の施策が決定していなかったため検討段階にとどまった。</p>	<p>① 「医療的ケア」では、通常の授業時間を越える履修時間が必要となることから、2015年度は授業時間増による対応を図っているが、2016年度以降は1科目（現在の2科目から3科目に）増やす可能性を検討している。</p> <p>② 本専攻卒業生に求められている資質・能力について、学外からの意見をいただき、さらに検討する。</p> <p>③ 現状でも利用していない実習先があるので、今後は学習目的に応じた実習先かどうかを精査していく。</p> <p>④ 様々な学生募集活動は行ってきたが、全国的に同じ状況で結果に表われていない。今後、外国人技能実習制度の対象職種に介護分野が追加されることから、留学生を対象にするなど本学独自の募集活動を検討することが必要である。</p> <p>⑤ 外国人留学生増加のためにも、さらに広報していくことが必要である。</p> <p>⑥ 前年度（2013年度）は行えていなかったケアチャーチ講座が復活したが今後はさらに教会の福祉のために本専攻ができる内容を検討していく。</p> <p>⑦ 2016年度から現場職員の介護福祉士受験には実務者研修が必須であることが決定しようとしている。ただし、これは一専攻のみで行える事業ではないので実施するなら学校全体での体制を検討していくことが必要である。</p>

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>3 神学研究科</b>			
神学研究科	<p>① 完成年度を過ぎた博士前期課程では、研究者・教育者コースの特色を出しつつ、教会教職課程後期として教会教職者コースのさらなる充実を図る。</p> <p>② 博士後期課程初年度の業務を円滑に行ない研究者育成にあたる。</p> <p>③ 教員の業績の出版や活動を通しての教会と社会への貢献をめざす。</p> <p>④ 国内外の神学教育機関との交流と連携を図る。</p> <p>⑤ 大学院教員資格審査規程に則り、後継者の育成に努める。</p>	<p>① 博士前期課程では、2年次の学生15名中14名に学位を授与した。</p> <p>② 博士後期課程を開設し、4名の学生が順調に1年目の研究を進めた。</p> <p>③ 教員は科研費その他の研究費も取得して、それぞれの専門分野で研究と教育を行った。</p> <p>④ お茶の水聖書学院、香港中華大学崇神学院（大学院）と交流の可能性について協議した。アジア神学協議会に貢献し、福音主義神学校協議会に参加した。</p> <p>⑤ 教員後継者の募集と育成を中長期的に進めた。</p>	<p>① 全学生が教会実習を行い、1年次の16名が教会インターンを行った。</p> <p>② 必修参加の教会教職特別セミナーを8回実施した。</p> <p>③ 研究科委員会でFD懇談を、学生授業評価に合わせて実施した。</p> <p>④ a. 研究科委員長は教会・大会等を36回訪問した。 b. 修了生14名中12名が教会等に就職した。</p> <p>⑤ 福音主義神学校協議会、アジア神学協議会等の総会や活動に参加した。</p> <p>⑥ 博士後期課程を予定通り開設した。</p>
<b>4 教会音楽専攻科</b>			
教会音楽専攻科	<p>① 学生募集に力を注ぎ、定員充足をはかる。</p> <p>② 2016年度カリキュラム改訂に向けて科目内容の精査に入る。</p> <p>③ 前身校の音楽課程卒業生に対する継続教育を検討する。</p>	<p>① 電話やメールでの問い合わせだけでなく、本専攻科志望のオープンキャンパス参加者もあった、2015年度入学者はいなかった。</p> <p>② カリキュラム改訂については、全学のカリキュラム改訂プロセスに合わせて進行している。</p> <p>③ 前身校の音楽課程卒業生の継続教育については、チャペルでの奏楽機会を継続的に提供している。また、教会音楽アカデミー主催の公開講座・講習会において演奏や指導などの場を設けるほか、『礼拝・音楽研究』への執筆依頼等の機会提供を行っている。音楽アシスタント制度については、本年度この制度の利用者がなかった。</p>	<p>① 分かりやすい学生募集要項の検討を行い、改良を行うことができた。また、機会あるごとに専攻科が目指しているもの、提供しているものについて伝えるなど、丁寧なフォローを行うことができた。</p>

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>5 教務部</b>			
(1) 教務	学生・学修ポートフォリオを実施する。	学生・学修ポートフォリオが実施され、1サイクルが終了した。	各学生により利活用の程度の差はあるものの、1年間実施され各データの蓄積がなされた。しかし全体を振り返る報告書をまとめることができなかったことは課題である。
(2) 生涯学習	地域エクステンションの新規開拓を行う。	継続している2つの地域エクステンションに加え、岡山エクステンションを新規開拓した。	① 1カ所の新規開拓を実現することができた。 ② 教会教職特別セミナーを9回開催し、学生以外にも累計15名の教会教職者の参加があった。 ③ 図書館項目を参照。
(3) 入試	学生募集要項、入試ガイドライン等の見直しを行う。	学生募集要項の「教育の目的」、入試ガイドラインの「入試に関わる危機対応」の重要項目の見直しを実施した。	当初計画通り達成できた。

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(4) 教員支援	<p>① 教員の研究活動を促進し、そのためのFDを実施する。</p> <p>② ICT活用教育の推進のための支援を行う。</p> <p>③ 授業テキスト刊行の準備を行う。</p>	<p>① 年3回のファカルティーフォーラム、夏の教員研修会、その他ワークショップなどにおいて、教員の研究活動の発表の場が増えた。</p> <p>② 2/10、3/6、3/10の教授会にて、アクティブラーニングとラーニングコモンスの研修を実施した。</p> <p>③ 進捗がなかった。</p>	<p>① 教育の改善については、個々の教員のアカデミック・ポートフォリオにおいて「教育目標」や「改善点」に関連の記載が増えており、PDCAの好循環が感じられる。組織的には2015年度に進めるカリキュラムの改訂に反映していく予定である。</p> <p>② 教授会内でのワークショップの増加と教員の安定した出席状況は、教育改善・研究活動推進に寄与している。</p> <p>③ 2年目を迎えた新任教員研修体制は、定期的な学部長との茶話会、外部研修への派遣など、継続的な整備が進行している。</p> <p>④ 教員支援関連事項をまとめた「教員ハンドブック」が3年目を迎えるにあたり、方針等の追加など、大幅な更新を行うことができた。</p> <p>⑤ 授業テキスト刊行については、特に準備を行うことがなかった。</p>

## 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(5) 教育情報	教務部・学生部で取り扱う情報データを一元化する。	アンケートの結果を受けて、学生情報等の管理プラットフォームに関して業者を交えて検討中。具体案に関しては次年度、学習管理システムに統合するかたちで明確にする。	
(6) イスラエル・スタディツアー	2015年3月に実施する。	3月16-30日、第11回スタディツアーを予定どおり実施した。	団長、添乗員を含めて18名（教員2、学生9、大学関係者・家族4、外部2、添乗員1）が参加し、充実した研修を行うことができた。
(7) 紀要編集委員会	2015年3月に『キリストと世界』25号を発行する。	予定通り『キリストと世界』25号を刊行した。	10本の記事（論文6、調査報告2、研究ノート2）を掲載し、充実した誌面となった。

2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>6 学生部</b>			
(1) 修学支援	<p>① 外部奨学金の獲得に努める。</p> <p>② 博士後期課程奨学金、優秀学生奨学金を新設し、学生への経済的支援を充実させる。</p> <p>③ 学納金の滞納者に民間の教育ローンを紹介する。</p>	<p>① 上田メソッド奨学金は当初の予定よりも増額した奨学金の提供があり、2名追加で奨学金を給付することができた。さらなる外部からの奨学資金獲得をめざして、奨学金委員会で案内チラシの内容を検討し、学長室と協力してチラシを作成することとなった。</p> <p>② 新たに設けた博士後期課程奨学金フルスカラシップと優秀学生奨学金にそれぞれ1名ずつ奨学金を給付した。既存の奨学金では学部生62名、大学院生22名に給付。オンヌリ教会奨学金を学部生3名に、上田メソッド奨学金を学部生7名、大学院生1名に給付した。全学生のうち52.63%の学生に給付奨学金を提供し、経済的な修学支援を行った。学生の必要に届く奨学金となっているか、アンケートによる確認を行う予定だったが、年度内に実施できなかった。</p> <p>③ 新入生オリエンテーションで民間教育ローンの紹介を行っている。学納金滞納者にも民間教育ローンを勧めているが、今回は申請が通らなかったため、現時点での利用者はない。</p>	<p>① 今年度の外部奨学金は外的要因により金額が増加したが、次年度はチラシを作成し外部への働きかけを行う予定である。</p> <p>② 経済的支援を充実させるために拡大傾向にある奨学金であるが、学生の必要に届いているか確認しつつ、既存の奨学金の整理と、経済的な必要を抱えている学生への支援を検討する必要がある。</p> <p>③ 民間の教育ローンは学生からの申請があっても借りられないケースがあるが、紹介は継続する。</p>
	<p>④ 障がい学生の講義保障と生活支援を検討・実施する。</p> <p>⑤ ハラスメント防止の啓発に努める。</p> <p>⑥ 前学期 GPA 1.80 未満の学生を対象としたピアチュータリングによる学習支援を実施する。</p>	<p>④ 障がい学生の支援については、今年度該当者がサポートの必要な学生がいなかったため実施していないが、担当者1名を外部研修会へ派遣し、研鑽を行っている。</p> <p>⑤ 意識啓発の一環として、ハラスメント防止に関わる手引きを学生のみならず教職員へも配布すると共に、相談員1名がセクシャルハラスメント防止連絡会に出席し研鑽を行った。</p> <p>⑥ 春学期8名、秋学期7名、冬学期4名の学生に週1回1時間のピアチュータリングによる学習支援を実施した。</p>	<p>④ 今年度は支援対象となる障がい学生がなかった。サポートの必要な学生に応じて対応する。</p> <p>⑤ ハラスメント防止パンフレットによる啓発のみとなった。教職員の研修会への派遣、学内での研修会などが必要である。</p> <p>⑥ ピアチュータリングによって学習習慣や方略が身につく、成績向上に結びつく学生が複数見受けられた。編入生の中に学期に2-6名、ピアチュータリングでは対応のむずかしい成績不振者がおり、対応が課題である。</p>
(2) 活支健康・生	<p>① 学生向けのセミナーを学生部と寮で協力して開催する(男女交際や生活習慣に関するものなど)。</p> <p>② 学生部長・男女子寮主事・学生相談室長で定期的にミーティングをもち、課題のある学生の状況把握と対応を検討する。</p>	<p>① 学生向けのセミナーとしては、男女子寮運営委員主催の恋愛結婚セミナーのみであった。</p> <p>② 月1回のミーティングで各寮全体の状況を把握することができている。</p>	<p>① セミナーは寮生ほぼ全員が参加という盛況ぶりであった。アンケート結果から次回セミナーも同じテーマで企画中である。</p> <p>② 特に課題のある学生の情報共有が行われ、支援しやすくなっている。</p>



2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(3) キャリア支援	進路支援に関するアンケート調査を実施し、検証を行う。	社会人基礎力結果（プレ調査→ポスト調査） ・対人基礎力 3.26→3.30 ・對自己基礎力 3.16→3.20 ・対課題基礎力 3.05→3.17 ・進路選択自己効力感（CDMSE） 3.39→3.49	社会人基礎力及び進路選択自己効力感ともに平均値が上昇しており、キャリア支援の一定の効果が確認できた。さらに分析を進めるために重回帰分析を試みたが標本数の関係から有意性が示されなかったため、t検定を実施したところ、社会人基礎力については対課題基礎力【 $t=1.45$ （片側* $P<.10$ ）】のみ有意傾向が認められた。この結果から、3つの基礎力の中で最も対課題基礎力が支援効果による信頼性が高いことが示された。 次年度も引き続き分析を進め、新たなキャリア支援の方策を探りたい。

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>7 総務部</b>			
(1) 総務課	<p>① 大学組織のあり方につき以下の点を再検討する。 a. 役職者の権限の明確化 b. 部制度の検証・評価 c. 内部監査のあり方</p> <p>② 職員の意欲・資質の向上を図るため、SDの活発化、職員人事の見直し等に関して以下を実施する。 a. 職員人事の基本事項に関する規程の策定 b. SD関連経費（事務局長決裁）を予算化 c. 人事評価制度の検討 d. 理事職者と職員の懇談会等の検討</p> <p>③ 同窓会との連携強化、および支援会活動との連携を視野に入れた同窓生との交流の活発化をはかる。</p>	<p>自己点検・自己評価活動において、組織や職員人事に関する現状や課題の分析を行い、点検・評価及び将来に向けた発展方策をまとめたが、個別の課題については着手できなかったものが多かった。</p> <p>① 役職者の権限については、学部長、研究科委員長等の権限について調整を行った。その他の課題については未着手。</p> <p>② SD研修を実施した。理事と教職員の懇談会を実施した。人事制度については、職員の資格制度について規程を制定したが、その他の制度については未着手であった。</p> <p>③ 同窓会幹事会及び卒業生交流委員会に、担当職員及び理事長が出席し、同窓会との交流を図った。</p>	<p>① 組織や人事制度の整備については、制度設計に遅れがみられ、経年の計画設定もなされておらず、課題がある。</p> <p>② SD研修会は実施されたが、予算化された経費は十分に活用されているとは言いがたく、より積極的な運用が求められる。</p> <p>新たに2名が課長に、2名が課長補佐に任用された。引き続き職員の人材育成を進める必要がある。</p>
(2) ① 管財関係	<p>チャペル保守計画の検討を行うとともに、排煙窓の修繕を実施する。</p>	<p>2014年度施設設備・修繕メンテナンス等49項目のうち（保留5項目、前年度実施済1項目を含む）37項目を実施した。 2014年度予算26,752,000円に対して15,817,083円の消化（消化率 59%）であった。 修繕を実施しなかった項目は、次年度以降に延期した。 チャペル排煙窓については、2015年3月23-26日の期間で、修繕を実施した。</p>	<p>施設・設備の整備に関する中期計画は策定されており、それに基づき各年度の整備・修繕等が行われているが、新しい状況に合わせた計画の見直し（バリアフリー整備を含む）が必要である。</p>
(2) ② 情報ネットワーク関係	<p>サイボウズ（グループウェア）による稟議システム活用の検討</p>	<p>① 情報ネットワークに関する必要な整備を実施した。 ② アクティブラーニングや学生の印刷システムについては、教育研究活性化設備補助金による機器の整備を実施した。 ③ サイボウズによる稟議システムについては、活用するまでに至らなかった。</p>	<p>教職員・学生とも情報環境の充実が図られている。特に今年度は、教育研究活性化設備補助金によるアクティブラーニング教室等の整備が特筆される。 今後は中期計画に基づく計画的な整備が望まれる。</p>

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
<b>9 図書館</b>			
	<p>① 学術情報の効果的提供のためTCU機関リポジトリ(IR)の構築を行う。</p> <p>② 館内ラーニング・コモンス環境の整備、及び図書館2階個室の整備を行う。</p> <p>③ 学術情報の発信充実のため、図書館HPの充実、図書館蔵書検索システムの向上をはかる。</p> <p>④ 利用者学習への支援のため、情報リテラシー資料、授業の充実をはかる。</p> <p>⑤ 電子資料保存への対応を行う。</p>	<p>① 機関リポジトリでは、著作権処理済紀要の論文を登録し、10月にWEB上で一般公開した。公開を教職員に連絡しPR,紀要25号を登録公開した。</p> <p>② 多読スペース壁にホワイトボードを張った。2階個室にパーティションを設置、図書館前オープンスペースをテスト前に活用した。グループスタディ室の利用は活発である。自由に使えるPCを整備した。</p> <p>③ ブログ、Twitterでの情報発信を行っている。次期検索システムについて業者と検討を進めている。</p> <p>④ 情報リテラシーについては、関連図書を展示。1年生初年度教育授業で1コマ、図書館員が担当してリテラシー教育にあたった。新入生図書館ガイダンス、留学生図書館ガイダンス、図書館ツアーを実施した。留学生向け日本語多読本を新たに購入した。</p> <p>⑤ 新規電子ジャーナルを追加購入、電子書籍を追加した。電子ジャーナルリストに無料EJを追加公開した。</p> <p>⑥ 神学校図書館フォーラムを8月に開催した。参加した神学校図書館スタッフと交流し、連携の模索を行った。</p>	<p>概ね計画に従って実施することができた。リポジトリのコンテンツ等、各事項の充実のため、継続的な取り組みを行っていく。</p>
(1) 共立基督教研究所	<p>① テンプルトン財団助成プロジェクト“Science for Ministry in Japan: The Theory and Practice of Christian Ministry in the Face of Natural Disasters”(2014-16年度)の1年目の活動を実施する。</p> <p>② 公共福祉研究センターによる「公共福祉学」創出に向けた研究活動を推進する。</p> <p>③ 活動成果の積極的な公表を進める。</p> <p>④ 継続して外部資金の導入に努める。</p>	<p>① Science for Ministry in Japan 7回の公式研究会、2回のミニ研究会、2回のセミナー、1回のワークショップ、1回のシンポジウムを開催。</p> <p>② 他の企画に時間をとられたこともあり、公共福祉研究センターとしての研究会・シンポジウムは未実施となったが、2回の「教会と地域福祉フォーラム21」の共催・協賛を行い、公共福祉推進への貢献を行った。</p> <p>③ Science for Ministry in Japan 専用ウェブサイトを開設して成果発信に努めた (<a href="http://www.tci.ac.jp/smj/">http://www.tci.ac.jp/smj/</a>)。 また外部との連携による公共福祉カフェがスタートし、専用ウェブサイトを開設した (<a href="http://www.tci.ac.jp/pw_cafe/">http://www.tci.ac.jp/pw_cafe/</a>)。</p> <p>④今年度、新たな外部資金への申請は未実施。</p>	<p>7回の研究会の参加人数は、延べ96名(1回平均13.7名)。密度の高い充実した議論が重ねられている。また賀川豊彦・ハル夫妻をテーマとしたシンポジウムは定員一杯の参加者が与えられ、アンケートでは高い評価を得た。今後も賀川関連シンポジウムの継続を計画している。</p> <p>成果の発信はスタッフの多忙により遅れ気味であるが、間接経費等によるアウトソーシングも行って進めていく。</p> <p>外部研究費への申請は次年度以降の課題である。</p>

# 2014年度事業報告

項目	計画	報告	
		達成状況	評価
(2) 教会音楽アカデミー	<p>① 受講生や社会のニーズを踏まえつつ、講習会・公開講座コンサートの内容をさらに充実させる。</p> <p>② ①の機会を学生募集にもつなげるよう努める。</p> <p>③ コンテンポラリーの賛美をプログラム化する。</p> <p>④ 継続して『楽譜集』に掲載できる新しい作品を生み出す。</p>	<p>① 2014年度行われたコンサート・公開講座・講習会はすべて大好評であり、参加者も例年を上回った。</p> <p>② 教会音楽専攻科への問い合わせが、2013年度は8名、2014年度は9名と微増、オープンキャンパスへの本専攻科志望の参加者も数名起こされている。</p> <p>③ 講習会におけるポピュラー系の音楽が、昨年度以上に自然に受け入れられる雰囲気醸成されつつある。</p> <p>④ 新しく生み出された作品を『楽譜集』に収めることができた。</p>	<p>計画に従って活動を実施することができた。</p> <p>コンサート・講習会への参加者、本学の音楽教育活動への問い合わせが少しずつ増加していることは活動の成果と思われる</p>
(3) 国際宣教センター (Faith and Culture Center)	<p>① 専門部会（千葉県キリスト教史研究会、実践神学研究會、教会教職セミナー、世界宣教研修セミナー等）及び世界宣教講座をとおしての教育・研究の充実を図る。</p> <p>② キリスト教各教団・教派の宣教研究機関、市民団体等との連携を推進する。特に、日本宣教リサーチ（4月発足）とテンプルトン財団助成プロジェクトを企画・実施する。</p> <p>③ 教会や地域への貢献としての施設貸出し業務を継続する。</p>	<p>① [教会教職特別セミナー] 9回のセミナーを開催した。</p> <p>[世界宣教講座] 開催期間：5月19-23日 講師：ロバート・リチャード・クック氏</p> <p>② [Science for Ministry in Japan] 特別セミナーとの合同企画 2回（9/8、9/29）</p> <p>[日本宣教リサーチ] ・「宣教ニュース」No.1-3を発行 ・外部団体との会合1回</p> <p>[その他] ・FCCセンター長、日本ローザンヌ委員会の委員長に就任（8/19） ・日本ローザンヌシンポジウム FCC協賛（11/8）</p> <p>[千葉県キリスト教史研究会] 3/14(土)開催</p> <p>③ 外部貸出し 数回の貸出しを行った。</p>	<p>① 前年度から継続している活動に加えて、新たに実践神学研究會をスタートした。</p> <p>② 日本宣教リサーチの設置と「宣教ニュース」の発行を行うことができたことは大きな成果であった。</p> <p>③ 地域連携では、②の活動のほか、千葉県キリスト教史研究会が印西市の地域研究会と協力関係を継続している。</p>